しんぶん赤旗

2016年7月20日（水）朝刊　学問・文化面

音楽

東京交響楽団名曲全集第119回

オール伊福部プログラム「協奏四題」

ミューザ川崎シンフォニーホール提供

丁々発止の激突こそ真髄

井上道義指揮、東京交響楽団で伊福部昭の協奏曲集を聴く。

伊福部のクラシック作品は、映画「ゴジラ」の音楽と比べて、その意外性で語られることが多い。だが、彼のクラシック音楽と映画音楽は二項対立でなく同じ根に宿る芸術だ。ともにメッセージ性をおろそかにできない人間の営為である。

今回演奏された4作のうち三つが東響初演という。同企画が井上芸術の一つとすれば、それらの演奏の積み重ねは同楽団の宝。それも今回の演奏に学んだ。

「ラウダ・コンチェルタータ」はマリンバ協奏曲（1976年）。弦楽部の神秘的な響きに、高田みどりのマリンバが躍動感をかき立てる。そのリズムが遼遠に広がるさまが目に浮かんだのは、低音が執拗に反復する伊福部音楽の力である。

「協奏風狂詩曲」はヴァイオリン協奏曲（48年）。山根一仁のソロと東響の丁々発止が行き着くのがまさに「ゴジラ」の音楽だ。このソロとオーケストラの激突こそ伊福部の真髄。20歳の山根にこれを託せた意義は大きい。次にはソロ暗譜で両者の激突を目の当たりにしたい。

「交響的エグログ」は二十絃箏協奏曲（82年）。華麗な箏の爪弾きと東響の厚い響きが調和する。いつもながら生命力あふれた野坂操壽の箏の美学により興奮が頂点に達する。

「リトミカ・オスティナータ」はピアノ協奏曲（61年）。山田令子のピアノが埋もれる箇所もあるものの、コンガなど3種の膜鳴楽器とともに山田の打鍵が大自然の活力を表現した。

井上＝東響は、伊福部芸術が古典の域に達していることを裏付けた。

（宮沢昭男・音楽評論家）

10日、ミューザ川崎シンフォニーホール